

9月21日、東京・御茶ノ水の連合会館で開かれた日ロクラブの定例会合で、石郷岡建氏（毎日新聞元モスクワ支局長）が「第5次プーチン政権について」と題して報告を行いました。3月の大統領選挙での勝利を受けて、5月に発表されたプーチン政権の新人事から見えてくるのは、「プーチン体制の終焉と後継者選びの始まり」「ポスト・プーチン体制準備の始まり」ではないかというのが石郷岡氏の見立てです。

以下、講演の主要部分と、当日の資料（抜粋）を同氏の了解を得て掲載します。（編集部）

講演録

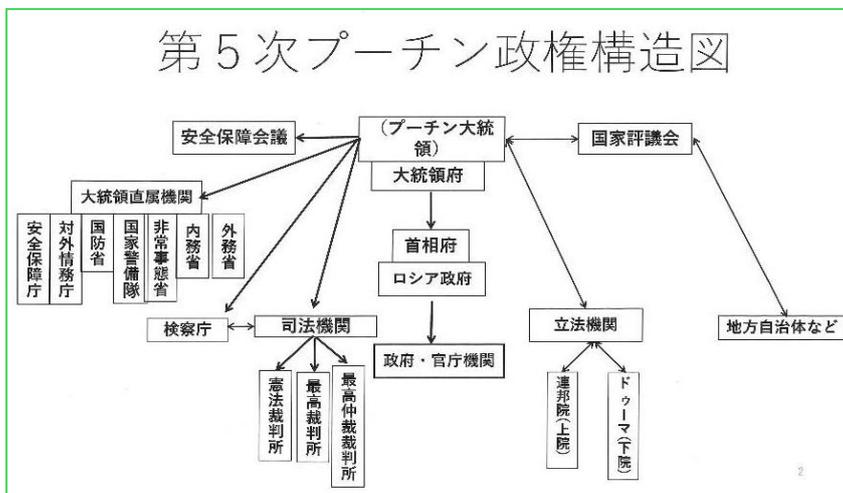
第5次プーチン政権について

～新人事異動に見る「プーチン後」の準備

石郷岡 建（毎日新聞元モスクワ支局長）

本年3月のロシア大統領選挙でプーチン大統領が87.28%の得票率で再選され、第5次プーチン政権が発足しました。5月7日に大統領就任式が行われ、新体制の人事が次々と発表されました。本日は、第5次プーチン政権について、「これから大きな変化があるかもしれない」という話をしたいと思います。

I. ロシアの政権構造



三権分立が大統領が強い権力を持つ

まずは、ロシアの政治について、基本的なことを確認しておきます。図は、現在のプーチン政権の構造図です。ロシア憲法では、「立法」「行政執行」「司法」の三権分立制度ということになっていますが、現実には大統領が三権を超えた強い権力を維持しています。他の国でもそういう例は多くありますが、憲法上は三権分立と言いながら、必ずしも三権が分立しているわけではないということでもあります。

では、ロシア大統領は独裁的な権力を持っているかということ、そうとも言い切れない。ロシアでも大統領は全国民の選挙で選ばれる。任期は6年です。ここが中国と違うところで、国民が「これはまずい」と思った時には選挙で大統領を降ろ

すシステムが一応はあるということです。

左の図で三権分立というのは、真ん中に大統領・大統領府があって、その下に首相府・ロシア政府・官庁機関がある。これが行政権力です。その右にあるのは立法機関で、連邦院（上院）とドゥーマ（下院）があります。上院、下院というのは、実はロシア憲法にそう書かれているわけではないのですが、ドゥーマとか連邦院がでてきた時に、分かり難いので、私は特派員時代に下院、上院と書くようにしました。これが議会＝立法機関で、ここで法律が審議され決定される。左にあるのが司法機関＝裁判所で、憲法裁判所、最高裁判所、最高仲裁裁判所となります。

行政機関は首相府と大統領直属機関に分かれる

ところが、首相府・ロシア政府が管轄する行政機関とは別に、大統領直属機関の組織、官庁があり、これは通常の行政機関に入っていない。どういう組織が直属機関かということ、外務省、内務省（警察）、非常事態省、国家警備隊、国防省、安全保障庁、対外情報庁などです。いわゆる「シラビキ」と呼ばれる軍・警察・治安関係を中心とした組織ですね。これらは全部プーチン大統領の直轄

下にあって、首相は関係ない。つまり行政府は、大統領直属機関以外の、経済・産業・貿易・保健・教育・文化・科学技術など主に国内の社会経済政策を担当することになっているわけです。日本だと外務省や警察、防衛省なども行政府に全部入っていますが、ロシアはそうっていないということです。

繰り返しますと、ロシアの三権の内容は、「立法」は上院と下院の二院制。「司法」は各種裁判所と司法組織です。「行政執行」は大統領府直接機関と首相直接機関に分かれます。「行政執行権力」が大統領直属機関と首相府・官庁機関と二つに分かれているため、ロシアの政治制度は「半大統領制」と呼ばれることもあります。しかし、現実には首相は大統領の指揮下にあるということになります。

ちなみに、政治権力と経済・社会統治力が分かれる制度は

ソ連時代に始まっています。プーチンの独裁だからということではないです。

「安全保障会議」と「国家評議会」

さらに、これらの政府機関以外に様々な会議・委員会が存在します。この中で最も大きな力を持っている権力組織が安全保障会議と国家評議会（国務院）です。

「安全保障会議」は、ロシアの国家・社会・個人に関する内外の重要問題および国家主権を守る課題での協議・諮問を行う大統領直接機関です。つまり、安全保障に関わる重要問題を協議し、大統領に諮問する。それを受けて大統領が決定を下す。こういう流れになっています。議長はプーチン大統領、副議長メドベージェフ元大統領、現在の事務局長はショイグ前国防相です。メンバーは軍事・外交・安保関係者が中心で、いわば大統領直属機関代表者たちの会議です。

「国家評議会」は、ロシア国家の社会経済の優先方向とロシア連邦の国内外の基礎的な政策を協議し諮問を行う大統領直接指揮機関とされています。国家評議会の議長もプーチン大統領で、副議長はいません。事務局長はデューミン前トゥーラ州知事です。メンバーは、ロシア連邦機関の代表、下院議長、下院の政党代表、地方自治体代表など、多くの人が入っています。

まだ、あまり指摘されていませんが、第5次プーチン政権において、これまで力を持っていた安全保障会議がだんだん力を失って、国家評議会の方へ権力が移りつつあるのではないかというのが私の考えです。

ロシアの政治権力機構の中では、これまで軍・治安関係者が集まる「安全保障会議」の方が重要で、有力組織だと見られていました。しかし、プーチン大統領は2020年、「国家評議会」を憲法に挿入し、安全保障会議と同等の地位に引き上げました。つまり、軍・治安問題優先から社会・経済問題優先へと舵を切り始めた。プーチン大統領の長期的目標が提示されたと言えると思います。このことは、後ほど述べるように、プーチンが次にその権力を誰に渡すかということと密接に関係してきます。

驚きを与えたショイグ国防相の解任

3月の大統領選挙の後、プーチンは5月7日に第5次大統領に就任し、新政権の人事を明らかにしました。ロシアの政府閣僚、および権力構造の顔ぶれに変化はなく、大きな動きはなかったとマスコミでは報道されました。しかし、人事異動を命じられた少数の関係者の動きをよく見ると、それは単なる職務の変更ではなかった。プーチン大統領の権力の終焉とロシア国家の方向転換の可能性を見通した国家戦略の変換期の第一歩が示されたように私には思えます。

大きな異動がなかった中で 人々に驚きを与えたのはショイグ国防相の解任でした。国防省は大統領直属機関で、国防省の下にロシア軍がある。軍のトップにいたのがショイグ国防相で、彼は解任されて安全保障会議の事務局長に移りました。ウクライナ戦争が続く中で、軍事行動・組織の指導者の解任は、戦争を続けられるかという疑問も生みました。左遷・更迭されたという声も飛んだ。

「ワグネル」の反乱騒ぎとの喧嘩両成敗？

ショイグ解任の背景には、昨年6月の民間武装企業「ワグネル」の反乱騒ぎがあったと思います。

ワグネルは国家の軍隊ではない。民間武装企業です。お金儲けの民間企業ですが、代表のプリゴージンは囚人を兵士として戦場に投入し、ウクライナ東部の戦況で非常に活躍をした。なぜかという、膨大な兵士の損耗を無視してひたすら前進させるような戦争の仕方をしたからで、私の考えではこれにロシア軍トップのショイグ国防相とゲラーシモフ参謀総長はいい顔をしなかった。「正規軍でもないワグネルが、何で手柄を立てたともてはやされ影響力を持っているんだ」と、プリゴージンとぶつかり合うわけです。この時プリゴージンは、ロシア軍がワグネルへの兵器弾薬供給を止めていると叫び、メディアを通して「俺たちに武器と弾薬を渡せ！」「ショイグとゲラーシモフは辞めろ！」と激しく攻撃した。国民の間にはワグネルに同情し、ロシア軍指導部を批判するような声が出るようになってきた。

これに対してプーチンは自分の考えをはっきり言っていますが、私は、プーチンは民間武装企業というものを全然評価していなかったと思います。根本的に、政府から離れた民間の軍隊はあり得ないというのが彼の考え方だったと思います。しかしながら、戦果を上げているので潰すわけにもいかない。結局プーチンは喧嘩両成敗をするわけです。

終わってみると、プリゴージンは反乱騒ぎを止め、「我々はただ大統領に対して、ロシア軍の不正を正してほしい」とお願いするために行進をしたんだと言うのですが、実際はプリゴージンの指揮下にあった兵士たちの中に、「仲間がどんどん死んでいるのに、兵器も弾薬も来ないのはおかしい」という、ある種の反乱に近い雰囲気があったということだと思います。反乱騒ぎの2か月後に、プリゴージンは飛行機爆発事故で死亡します。反乱の報いで殺されたという噂が飛びましたが、真相は不明です。

裏社会に通じた「ワグネル」プリゴージン

話が横道にそれますが、プリゴージンの背景には一筋縄ではいかない様々な組織やグループがあり、特に彼は裏の社会に強いわけです。囚人を兵士に募集した話ですが、凶悪犯を含む囚人たちがそんな簡単に兵士に行くわけではありません。なぜかという、ロシアの裏社会というのは、ものすごい力を持った社会で、第2次大戦前までは一切ソビエト政権の命令に従わないという、そういう組織でありました。親分・子分の関係が非常に強く、結束力が固く、政府とぶつかり合っていた。

第2次大戦が始まってドイツに攻め込まれたスターリンは、苦境を打開するために、ロシア正教とこの反社会組織に対して、戦争への協力を依頼するわけです。ロシア正教は、宗教弾圧の緩和と引き換えに、それを呑んだ。裏社会・囚人組織はどうなったかという、半分に分かれました。国のために協力しようというグループと、権力組織ましてや共産党政権には一切従わないというグループに割れた。

その後何が起こったかという、ソ連国内の刑務所の中で囚人同士のものすごい殺し合いが始まった。「スーカ戦争」と言われています。「スーカ」はロシア語で雌犬。いわゆる囚

人言葉の雌犬とは「どうしようもない奴ら」という意味で、「雌犬は全部殺せ」という話になって、ソ連全体でものすごい争いが起きたわけです。この話は外部にはほとんど伝わっていませんが、その時代のスーカ戦争を知っている親分連中は簡単には囚人を兵士に送ることはしないはずで

しかし、プリゴジンがこれをやった。彼と囚人組織・親分組織の間に何らかの関係がないとできない話です。この裏社会との関係は、プリゴジンが一介の乱暴者からレストラン・ビジネスで成功し、民間軍事会社を経営して、プーチン政権にも深く食い込み、どのようにしてこれほど強い力を持つようになったのかという話とつながるのですが、この話はここで留め置きます。

ロシア社会のもう一つの側面

つけ加えておくと、ロシアの犯罪組織にはいろいろあって、例えばロシア人の犯罪組織とユダヤ人組織、チェチェン人組織、その他民族ごとに分かれていて、簡単には説明することができません。ということで、裏にはいろんなものがあるので、プーチンがプリゴジンを暗殺したと簡単には言えない状況があるわけです。

もう1つ言うと、ロシアではこの犯罪組織の義理人情みたいな世界、日本で言えば「網走番外地」のような、必ずしも悪者ではないけれど、義理人情に惹かれてそういう世界に入り、犯罪に手を染めてしまったというような話があり、こういう世界には隠れた人気がありました。

歌の関係でも、例えば日本で言うと歌謡曲ですが、この裏の世界の音楽というの、別にそういう犯罪組織だからということではないのですが、何故か心に響く歌が多くあります。実はプーチンもそれに共鳴していたというエピソードがあり、ソ連時代にプーチンはKGBの学校に入りますが、「プラトナヤムジカ」(犯罪者音楽)という犯罪組織で歌われる音楽を密かに集めて、学校の中に隠していたことが発覚し、放校処分寸前までいったとされています。

ということで、ロシア社会には、この裏の世界＝義理人情と強烈な仲間意識、ときにはそれが根強い反権力意識に結びつくわけですが、そういう社会がロシアにはあるということを知っておく必要があると思います。

軍事経験のないエコノミスト、ベラウソフ新国防相

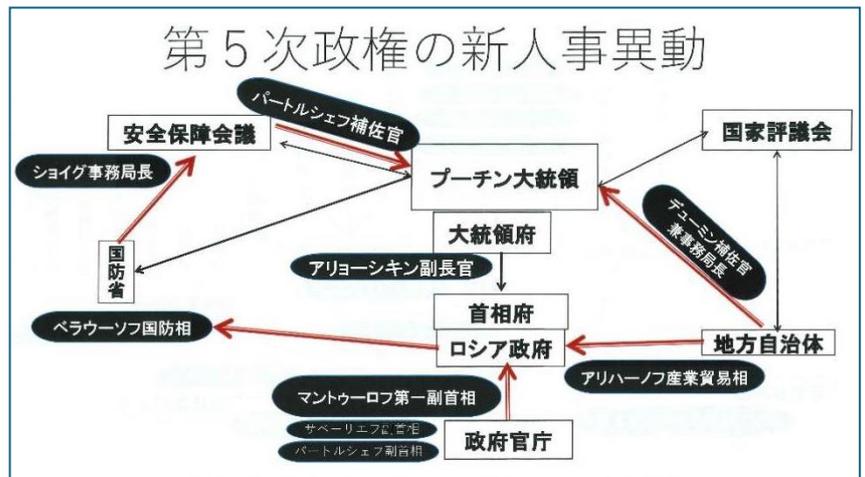
話が脱線しましたが、ショイグの国防相解任はプリゴジンの反乱騒ぎとの喧嘩両成敗だったのではないかとされています。兵器と弾薬をワグネルにちゃんと渡していればこんな騒ぎにはならなかっただろうというわけです。現在、ロシアでは検察庁が、軍内部の汚職摘発を進めており、かつてのショイグの部下たちが次々と逮捕されていることも、関係があるかもしれません。もっとも、ペスコフ大統領報道官は「ショイグは国家安全保障会議事務局長に移り地位をあげた。左遷ではない」と説明しています。

ショイグが国防省を去った後、新国防相になったのはベラウソフ第一副首相でした。この人事もロシア社会を驚かせ

た。ベラウソフという人は、実は軍人でもなんでもなく、経済の専門家です。軍事経験がないまったく素人のエコノミストの国防相就任に、戦争は続けられるかという疑問の声が出ました。

ベラウソフの父親はソ連時代の有名なエコノミストで、スターリン死後の雪解け時代に、社会主義経済からの脱皮をめざす経済改革(コスイギン改革)を試みたことで知られる有名な人物でした。息子のベラウソフも父親と同じ道を歩み、モスクワ大学経済学部へ入学、エコノミストになりました。彼は若い時期に「物理・数学学校」に学び、大学では経済サイバネティクス専門家をめざし、マルクス主義経済学ではない数理経済学を専門としました。今回の戦争でも、ITやデジタル新技術に関心を持ち、無人飛行機(ドローン)の存在に目を向け、「技術主権」の名のもとに、ドローンなどの技術開発・生産を支援しました。軍事支出の効率化、軍経済の国家経済への統合なども主張しています。

ベラウソフの登場に世界はあつげにとられました。特に米国とウクライナの関係者は、「最も強い、われわれにとってまずい人物が現れた」とコメントしたぐらいです。陸軍重視のロシア軍にとっても、今後大きな軍事・経済改革が訪れると、戦々恐々の騒ぎとなったとされます。現在、ロシア軍内部では、賄賂・横領など軍内部高官の汚職捜査が進んでいます。一方、ベラウソフは「完璧に腐敗から遠い役人」と言われており、プーチンの評価は非常に高いとされています。



II. 第5次プーチン政権の人事異動

さて、第5次プーチン政権の人事異動の主な内容を見てみましょう(上図参照)。

パートルシェフ安全保障会議事務局長の異動

まず、ショイグが国防相から安全保障会議事務局長に移った。ショイグの後には、ベラウソフ第一副首相がロシア首相府から異動して新国防相になった。安全保障会議の事務局長だったパートルシェフは、プーチンの親友であり、非常に力を持っていた治安・情報関係の第一人者です。彼を事務局長から外して大統領補佐官に就けた。パートルシェフの新しい役割は造船問題担当の補佐官です。地位が上がったとは言いがたい人事異動で、彼は安保会議の要職を取り上げられて、治安関係から外された形です。その代わりかどうかは知りま

せんが、息子のドミートリー・パートルシェフ農業相が副首相に昇進しました。「もう俺たちの時代ではない。若い者たちに席を譲るべきだ」とプーチンがパートルシェフの肩を叩いたのかもしれませんが。補佐官という大統領のすぐ近くにパートルシェフ(父)を移し、実際は、騒ぎを起こさないように取り込んだのではないかと私は思います。

軍・治安優先から社会・経済優先への移行か

パートルシェフの異動は、本人だけではなく、ソ連時代から大きな権力を振るってきた治安・情報機関を抑え込み、改革を行うというシグナルだったかもしれない。これは私の個人的意見ですが、プーチン時代が終焉へと向かうと、様々な組織が騒ぎを起こす可能性があります。治安・情報関係組織の上層部で権力を振っていたパートルシェフを大統領府に移し、いわば権力指揮下に置き、権力闘争で動かないように監視するという考えがあったかもしれません。さもなければ造船担当の大統領補佐官という意味がわからない。しかし、パートルシェフが静かに引退の道を歩むかどうかは不明で、今後どうなるかはまだわかりません。

その一方で、プーチンは、軍・治安関係機関の国家問題決定機関である「安全保障会議」に代わって、地方行政組織代表を取り込んだ、社会・経済問題を協議する「国家評議会」の地位を引き上げる措置を取っています。「国家評議会」を重要国家問題評議組織の中心へと移そうとする目論見が見え隠れします。軍・治安優先から社会・経済優先への移行であり、軍・治安組織の反発が爆発しないように、ロシア国家全体の組織を動かし始めたとも言えるかもしれません。あるいは、ポスト・プーチン時代の未来構図を描き始めたとも言えるかもしれません。もっとも、そんなに簡単に物事が進むとは限りません。

次期大統領有力候補、デューミン国家評議会事務局長

そこでもう1人の人物に焦点が当たります。デューミン・トゥーラ州知事です。この人が今回の人事異動で大統領補佐官に就任し、しかも国家評議会の事務局長になった。州知事の前は国防省・ロシア軍にいた人ですが、プーチンの命を受けて国家評議会事務局長に就任し、ロシア全土の地方自治体組織を集めて社会・経済問題を立て直すための強大な組織に変えていく任務を受け取った形です。

実は、デューミンは、電波・電子工学軍事高級学校を卒業後、ロシア連邦警護庁に入り、プーチン大統領の警護官を務めた人物です。そこでプーチンに認められ、軍参謀本部に移りました。デューミンは2014年3月のクリミア半島のロシア編入作戦を指揮したと言われています。その後、陸軍参謀本部長、国防次官を経て、トゥーラ州知事に移りました。

つまり、デューミンは、治安・情報機関、軍参謀本部、地方自治体と様々な職務を移り渡し、プーチンはその状況を見ていた可能性が強い。ロシア社会ではデューミンは次期大統領最有力候補とも言われています。大統領補佐官として軍・治安関係を見ながら、これから国家評議会をどのように育て、力を結集するのかで、デューミンおよびロシアの将来の道が決まると言っていってもいいかもしれません。

軍需産業の第一人者、マントゥーロフ第一副首相

一方、ベラウソフが新国防相へ異動した後に、その後任の第一副首相の席に座ったのはマントゥーロフ産業貿易相です。彼はモスクワ大学社会学部を卒業し、ヘリコプター製造会社に就職、国防産業の世界で力をつけ、連邦軍事産業委員会幹部会議長になった。ロシア政府内部の軍需産業の最大責任者です。その軍需産業の第一人者がロシア政府の第一副首相になった。

マントゥーロフは、国防軍需産業複合体「ロステフ」の会長で、ロシア軍需産業界を牛耳るチェーメゾフと近い関係にあります。チェーメゾフは、ソ連時代にKGBの職員として東独に赴任しており、プーチンと同じアパートに住んでいたとされます。

マントゥーロフ第一副首相は、ウクライナ戦争を背景に、兵器および軍需製品の増産という大任務を請け負ったことになる。彼は、国防省に移ったベラウソフとともに、ウクライナ戦争状況の情報交換をしながら、軍需産業および近代兵器の開発・発展を進めることとなります。とはいえ、100万人以上の人々が働き、官僚主義と汚職・横領などがはびこっている保守的ロシア軍の組織改革を進めることができるのか、ウクライナ戦争の行方にも関わる大きな問題ですが、必ずしも前途が明るいとは言えない状況です。

もう一人の若手候補、アリハーノフ産業貿易相

このベラウソフ国防相、マントゥーロフ第一副首相、チェーメゾフ「ロステフ」会長の3人の軍事・軍需産業ブロックに、もう1人若い次期大統領候補がやってきました。マントゥーロフは産業貿易相から第一副首相に昇任したわけですが、その空席を埋めて産業貿易相に就いたのがアリハーノフ前カーリーニングラード州知事です。彼は、わずか38歳でありながら、カーリーニングラードで大活躍し、知事選挙ではプーチンを追いかける81.06パーセントの驚異的な得票率を獲得しました。下院の産業貿易相の承認討議でも、賛成430反対0という圧倒的な支持を獲得しました。この人物も次期大統領候補と言われています。プーチンは、軍需産業という重要部門で、アリハーノフに経験をさせて、どのように伸びるか、見守っている可能性が強いと思います。

以上を踏まえたうえで、現在の第5次プーチン政権の人脈図を次頁に載せておきます。

Ⅲ. 「プーチン体制の終焉」

では、プーチンは今、何を考えているのでしょうか。

エリツィンはなぜプーチンを次期大統領に選んだのか

プーチンは、エリツィン大統領から次期大統領の継承を通告され、ロシア国家の指導者の道歩きました。プーチンは今、その昔の出来事を一生懸命考えている可能性が強いと思います。自分が経験した大統領の座の引き継ぎの際に何が起きたのか。プラス、マイナスを考え、今度は自分が後継者通告をする立場になるが、どうすればいいのかと考えていると思われます。

エリツィンはなぜプーチンを選んだのか、不明な部分が多

い。プーチンは、当時、KGB 出身の若い官僚で、無名な人物だった。突然、首相に任命された時、世界は「プーチンとは誰か？」という反応でした。エリツィンは、ソ連・社会主義を否定し、リベラル民主主義の流れを目指していた。建築労働者出身であり、政治・経済の専門家やさらには治安・情報関係者ではなかった。細かく論理的に話を進めるといよりは、面倒になるとダイナマイトで全てを爆破し、ゼロにするような人物でした。

一方、プーチンは、レニングラード大学法学部卒業の英才で、母国のために諜報活動をするのを夢見て KGB 組織に入った。必ずしも、エリツィンと同じ考え方、生き方をした人物ではなかった。にも関わらず、なぜプーチンが選ばれたのか。それは正しかったのかという疑問にもなります。

エリツィンがプーチンに行ったことが正しかったと考えるならば、プーチンはいずれ訪れるであろう自分の引退・後継者への引き継ぎに、利用するかもしれないと私は思います。

考えられるプーチンの選択は、以下のようなものであるかもしれません。

- ① 若い人を選ぶ。
- ② よく知られている有名な人物に限る必要はない。
- ③ 自分と同じような性格の人物である必要もない。
- ④ 思想・考え方が同じである必要もない。
- ⑤ 自分と同じ職業に従事した人物を選ぶ必要もない。
- ⑥ 国家建築という壮大な構想に耐えられるかどうかだ。

上記のことを考えると、プーチンは、後継者は治安・情報機関やシラビキのようなプーチンがよく知っている世界から選ぶ必要はないと考えているかもしれない。経済専門家や理科系技術者でもいいと考えているのではないか。ある意味、一つの部門に集中する人物よりも、他の部門でも働くことができ、柔軟な態度で何でも理解ができる人物の方が国家運営はうまくいくと、いまさらながら考えているのではないかと思われます。

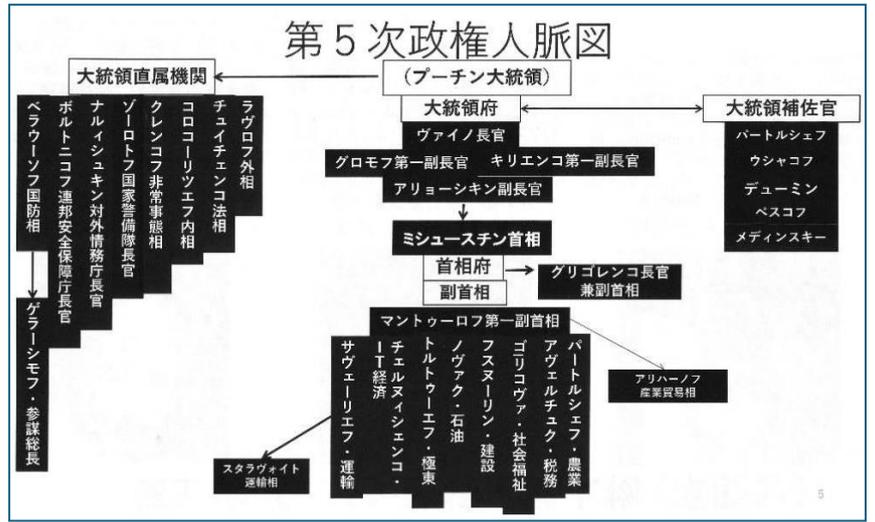
プーチンが語ったロシア国家の指導者像

実は、プーチン大統領は 2024 年の 2 月、未来のロシア国家の指導者はどのような人物であるべきかを語っております。

- ① 頼りになる。
- ② 信頼できる。
- ③ ロシア国家へのしっかりとした忠誠がある。
- ④ 国家主義者（正確には、脆弱ではない国家性・国家力がロシアに必要だと考えている人物）。
- ⑤ 国家主義の固守。
- ⑥ キリスト教およびスラブ的価値観の信奉者。

このように言っていました。

④の国家主義者というのは、ちょっと説明が必要です。ロシア語でガスダールストヴェンニクと言うのですが、日本語にはない概念で、英語でも該当するものがない。国家主義者というと、欧米では強大な力を持つ対外的侵略的な国家の信奉者を想定するのですが、ロシアでは内部の方が問題であって、プーチンは脆弱でない国家を作ることが国家主義だと言っています。



いつまで大統領を続けるのか

最大の問題は、いつ大統領の座を降りるのかということかもしれません。プーチンは、現在 72 歳。任期 6 年で 78 歳まで大統領の地位が許されている。さらに大統領の座を求めるとなれば、もう一度選挙に勝って、84 歳まで大統領の地位を継続することができる。しかし、現在 80 歳のバイデン大統領は、高齢不安による言動・行動から大統領選挙からの撤退を宣言せざるを得ませんでした。プーチンも高齢化現象が迫ってくる可能性がないとは言えません。あと 12 年間大統領を務めるのは無理との声が強いです。仮にもう一期大統領職に挑戦しても、次の 78 歳以降 (第 6 次プーチン政権) は、プーチン時代は終わるといふ雰囲気がどんどん強まっています。つまりロシア社会全体が不安定になっていく可能性が高い。

「もう間もなく大統領は去っていく」という現実が近づくと、プーチンの支持率は急激に低下していく可能性がある。そして利害が絡んだ権力闘争が始まるかもしれない。出来れば、プーチンは 78 歳で次の後継者を選び、後継者の背後で見守り、支援するという立場をとる方が正しいかもしれない。その方が、国内不満や反乱騒ぎを止め、ロシア国家を崩さない、守るといふプーチンの思想・考え方にかなっていると思います。

スムーズな権力移行はできるのか

プーチンは、以前から「大統領の座を降りる、もしくは降りたい」と示唆したり、愚痴を話していました。しかし、2003 年のイラク戦争以降、米露関係の対立が激しくなり、結局ウクライナ戦争へと進んでしまいました。世界秩序・世界戦略のぶつかり合いは、簡単には終わらない状況にあります。

この国際状況を背景に、ウクライナ戦争が進行中で、いつ終わるかははっきりしない。プーチンは、78 歳までに権力から降りて、若い指導者に権力を譲るのが、安定した政権移譲になると考えているのではないかと、私は思います。

戦争を抱えてスムーズな権力移行ができるのか、大きな疑問もありますが、78 歳以降も権力を維持するとなると、どこかで大統領の悲劇が始まる。多分、プーチンはそのことを理解しており、第 5 次政権の人事異動では、その問題が影を投げかけていたと私は思います。若い指導者を政権構造に入れるという目論見が明らかに進められています。しかし、これ

が上手くいくかどうか、背景には単なるロシア国内の権力・利害闘争だけではなく、世界秩序の変換という大きな動きが進んでいる。プーチンもしくはロシアがうまく対処できるのか、疑問が多いのが実態と言えるかもしれません。

ということで、今回の人事異動を見ると、どう見てもこれはポスト・プーチンの新しい時代を作るために、その準備が動き出したのではないかと、私は感じております。

IV. 第5次プーチン政権の主要人物

(軍関係) アレクセイ・デューミン (大統領補佐官)



1972年8月28日、クールスク州生まれ。電波・電子工学軍事高級学校卒業後、ロシア連邦警護庁を経て、大統領安全法保障庁でプーチン大統領警護。2014年軍事参謀本部情報局次長、クリミア編入作戦を指揮。陸軍参謀本部長、国防次官、トゥーラ州知事などを歴任。現在、大統領補佐官、国家評議会事務局次長。次期大統領有力候補で、現在、次期大統領に最も近いと目されている。

セルゲイ・ショイグ (安全保障会議事務局長)



1955年5月21日トゥヴァ自治共和国生まれ。父親は少数民族トゥヴァ人、母親はウクライナ系ロシア人とされる。クラスノヤルスク市工業大学入学、建築を学ぶ。シベリア各地で建築技師を歴任。非常事態相、モスクワ州知事を経て、国防相に就任。将来の大統領候補と言われたことも

あった。彼の夢は、本当は国防・治安関係ではなくて、シベリアに立派な建築都市を作るのが夢だと言っている。

ニコライ・パートルシェフ (大統領補佐官)



1951年7月11日、レニングラード生まれ。造船大学卒業、国家保安委員会(KGB)高級学校、KGB防諜局を経て、プーチン大統領の後を追うように、大統領府、連邦保安庁、安全保障会議事務局長に就任。プーチン大統領の側近で、有力な後継者とも言われた。新政権では、安保会議から大統領補佐官(造船担当)に異動した。

(軍需関連)

セルゲイ・チェーメゾフ (国営軍需複合体「ロステフ」会長)

1952年8月20日イルクーツク州生まれ。同州国民経済大学卒業。貴金属・非鉄金属の技術者。KGB関連組織に勤務、東ドイツに赴任し、プーチンと同じマンションに住んだ。

大統領府対外経済局長、ロシア国防輸出企業会長、ロシア軍需産業を牛耳る有力者。軍事アカデミー・メンバー。

デニス・マントウーロフ (第一副首相)



1969年2月23日、ムルマンスク生まれ。94年モスクワ大学社会学部卒業。露印合弁航空運輸会社に勤務。ウラン・ウデ航空会社、ヘリコプター製造会社を経て、国防産業統一産業連盟代表、産業・エネルギー次官、産業貿易相、副首相兼ロシア連邦軍事産業委員会幹部会議長。軍需産業の政府側トップ。

アントン・アリハーノフ (産業貿易相)



1986年9月17日、アブハジア生まれ。多数の民族の血を引く。92年のグルジア・アブハジア戦争でモスクワへ逃避。財政、法律を学び、法務、産業貿易省勤務。キャリアニングラードへ移り、30歳で最年少知事。下院全員一致で産業貿易相を承認。将来

の大統領候補の一人。

(経済刷新) アンドレイ・ベラウーソフ (国防相)



1959年3月17日、モスクワ生まれ。物理・数学学校卒業。モスクワ大学経済学部入学。経済サイバネティックス専門家。社会公平・計画経済を推進。「完璧に腐敗から遠い役人」と呼ばれている。プーチン大統領が最も信用した経済アドバイザーで、父親はソ連時代のコスイギン経済改革に関与した。

マキシム・アリョーシキン (大統領府副長官)



1982年7月21日、モスクワ生まれ。モスクワ高等経済学院大学院を卒業。第一級エコノミスト。ロシア中央銀行チーフエコノミスト。ロスバンク役員、財務省長期戦略計画局長、財務次官、経済開発相、日露貿易・経済協力問題大統領特別代表、大統領補佐官を歴任。ロシア経済の未来を導く人物と言われていて、この人も次期大統領候補である。

ヴィタリー・サヴェーリエフ (副首相/運輸担当)



1954年1月18日、タシケント生まれ。レニングラード機械・力学工学大学卒。技術エンジニアの様々な仕事をした後、経済発展・貿易省次官、航空会社「アエロフロート」会長職に就任し、世界有数の会社へと指揮。その後、運輸相に就任。今回、運輸問題全体を担う副首相へ昇格し

た。

(政府行政)

ミハイル・ミシュースティン (ロシア政府首相)



1966年3月3日、モスクワ州生まれ。ユダヤ系ロシア人。モスクワ工作機械・機器大学でシステム自動設計を学び、西洋の情報工学導入を指揮。連邦税務局へ移り大きな業績を残し、税務庁長官へ。真面目かつ綿密に仕事こなし、プーチンの評価は高い。メドベージェフの後任首相。

ドミートリー・グリゴレンコ (副首相・首相府長官)



1978年7月14日、チュメニ州生まれ。国立クバン大学卒業。クラスノダール州の税務組織に入り、税務庁副長官まで上り詰めた。情報工学にも関心を持ち、当時の上司ミシュースティン長官の目に留まり、副首相、首相府長官に。現在、首相を支える有力人物。

アントン・シルアーノフ (財務相)



1963年4月12日、モスクワ生まれ。モスクワ財政大学卒業。漁業企業計画研究所エコノミスト。財政専門家。財務次官、財務相、第一副首相などを歴任。年金年齢の引き上げを主張し、大きな批判を浴びた。大学、銀行等にも勤務。論文「市場経済の移行条件における国家予算政策」。

(エネルギー経済)

イーゴリ・セーチン (石油企業「ロスネフチ」会長)



1960年9月7日、レニングラード生まれ。レニングラード大学文学部卒、内戦のアンゴラで軍の通訳(ポルトガル語)。ソ連崩壊後、サンクトペテルブルグ市役所に移り、プーチンの個人的秘書。以後、プーチンとともに動き、大統領府副長官に。治安関係組織と密接な関係を築き、石油会社ロスネフチを世界的企業にのし上げた。

アレクサンドル・ノヴァク (副首相)



1971年8月23日、ドネツク州生まれ。北極圏のノリリスクへ移住し、工業研究所で経済学・経営学の学位取得。ノリリスク鉱業会社に入り、クラスノヤルスク州副知事、連邦財務次官、エネルギー相、さらにエネルギー関連会社の取締役を歴任。エネルギー全般の総責任者。ロシア経済の動向を握る。

アレクセイ・ミーレル (ガス企業「ガспロム」会長)



1962年1月31日、レニングラード生まれ。ドイツ系ロシア人。レニングラード財政・経済大学卒。チュバイスを中心とした若い改革派経済学者グループに帰属。プーチンが議長だった市役所対外関係委員。巨大ガス企業に移り、世界的な影響力を持つトップ経営者に。

(大統領を支える人たち)

セルゲイ・ソビャーニン (モスクワ市長)



1958年6月21日、ハンティ・マンシースキー民族管区生まれ。祖父はロシア正教古儀式派の信徒。コストロマ工科大学を卒業。チェリャビンスクの圧延工場で働き、コガリム市長、上院議員を経て、チュメニ州知事、第一副首相、大統領府長官を歴任。モスクワ市民の支持率は非常に高い。

セルゲイ・キリエニコ (大統領府第一副長官)



1962年7月26日、スプーミ生まれ。ゴリキー水上交通大学卒業後、共産党青年組織の指導者に。ネムツォフ州知事に引き抜かれ、燃料エネルギー省第一次官、同相、首相。ロシア通貨危機で解任。その後、原子力庁長官、ロシア原子力社長。プーチンの信頼は意外に強いとされる。原子力関係のトップ。

アントン・ヴァイノ (大統領府長官)



1972年2月17日、エストニア生まれ。曾祖父はロシア革命に参加、祖父はエストニア共産党第一書記。本人はモスクワ国際関係大学を卒業後、在日ロシア大使館勤務。外務省第二アジア局、大統領府議典局勤務を経て、首相府長官、大統領府長官。「質の高い役人、陰謀家ではない」と言われる。

(豪商・オリガルヒ)

ゲンナージー・ティムチェンコ (起業家・オリガルヒ)

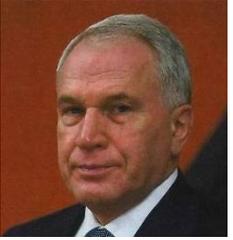


1952年11月9日、アルメニア共和国生まれ。レニングラード軍事機械大学卒。対外貿易省技術者。KGB支配のフィンランド会社に入り、石油関連の仕事をして経営者に。フィンランド国籍を取得(ロシアと二重国籍)。プーチンの親しい友人で、「ロシアの隠された億万長者の1人」とされる。

アルカージイー・ロッテンベルク (起業家・オリガルヒ)

1951 年 12 月 15 日、レニングラード生まれ。ユダヤ系の家系。レニングラード体育大学卒。プーチンと柔道クラブを打ち上げた。ソ連崩壊後、物々交換で利益を増大させ、ガスプロムとの関係を広げ、ガスパイプライン建設に関与し、億万長者になった。

疑惑の「プーチン宮殿」(※)の“持ち主”とされる。

ユーリー・コヴァリチュク (起業家・オリガルヒ)

1951 年 7 月 25 日、レニングラード生まれ。母親はユダヤ人。レニングラード大学物理学部卒。「ロシア銀行」会長。金融・不動産・メディア分野に巨大資産。プーチンに最も近い人物で、クリミア併合を説得したとされている。反リベラル・反西欧・陰謀論。息子は会計検査院長官。

計検査院長官。

※ プーチンの宮殿 数年前に反対派のナワリヌイ・グループが、クリミアに近いカフカス地方に作られた広大な宮殿を暴露した。宮殿を空撮した YouTube 動画はロシアで物凄い反響があり、何千万という人がこれを視聴した。オリガルヒの 3 人は、プーチン宮殿に膨大なお金を使ったと言われている。

※この図を作っていて思ったのは、いかにプーチンと近い人物が多いかということと、もう一つは、この人たちは、出世の階段をストレートに上がってきたのではなくて、アンゴラで通訳をしていたとか、漁業をやっていたとか、下から這い上がってきた人たちがプーチンと関係を結んで、権力体制に加わってきているという感じがする。また、経済関係には意外と理科系の専門家が多い。(了)

JICのロシア語留学・研修

35 年間の実績だから、JIC のロシア語留学

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に日ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この 35 年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 4,500 名以上にのびます。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ことや、緊急事態の際の連絡対応など、留学中の皆様をバックアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

ロシア語長期留学 9 月生・募集中



オンライン
相談受付中!

期間：2025 年 4 月 1 日より 10 ヶ月

締切：2025 年 1 月 15 日

モスク国立大学 984,000 円(授業料 10 ヶ月) << 予価 >>

サンクトペテルブルグ国立大学 1,039,000 円(授業料 10 ヶ月)

ゲルツェン教育大学 908,000 円(授業料 10 ヶ月)

ウラジオストク極東連邦大学 430,000 円(授業料 10 ヶ月)

シンスク国立言語大学 422,000 円(授業料 10 ヶ月)

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金
および取得手数料などががかかります。

ロシア以外の国でのロシア語留学の手配も可能です！
(中央アジア、バルト諸国など)

◆JIC ロシア留学デスク◆

電話またはメールでご連絡ください。

東京事務所 平日 9:30-16:30 03-3355-7294

※留学相談はオンラインで行っております(要 事前予約)

◆◆編集後記◆◆

▼ウクライナ戦争が始まって 2 年半。日ロ交流活動は極めてやりにくい状況が続いています。しかし、私たちは立ち止まっているわけではありません。本誌「日ロ交流情報」欄で毎号報告しているように、各地で、今できる活動が積み重ねられています。▼今秋も、ロシア語映画発掘上映会、日本ロシア音楽家協会創立 40 周年記念コンサート、ロシア文化フェスティバル IN JAPAN、日ロ協会などの講演会…と多くのイベントが予定されています。▼JIC も負けずに、旅行・留学分野での日ロ交流拡大に邁進します。読者の皆さんからの返信、声かけが大きな力です。応援よろしくお願いたします。(F)